［別紙］

国の重要無形文化財「色絵磁器」の指定及び保持者としての今泉今右衛門氏の認定について

今泉 今右衛門（雅号　十四代 今泉 今右衛門）

今泉今右衛門氏の代表作「色絵薄墨墨はじき柘榴文蓋付瓶」

重要無形文化財（工芸技術の部）

「色絵磁器」　　今泉　今右衛門（雅号　十四代　今泉　今右衛門）

［１］　重要無形文化財の指定について

①　名称　　色絵磁器

② 重要無形文化財の概要

色絵磁器は、釉薬をかけて本焼した磁器の表面に上絵具で文様を描き、さらに上絵窯において低火度で焼き付ける技法である。伝統的な上絵具は、着色剤である金属酸化物と媒熔剤（ばいようざい）である白玉と呼ばれるガラス粉末によって調製される。この技法は、中国の明・清時代に発達した。

我が国の色絵磁器は、近世初期に中国の影響を受けて有田で始まり、以来、各地で独自の発展を遂げた。現代の陶芸においても重要な分野であり、高度の芸術的な表現を可能にする技法となっている。

色絵磁器は、芸術上特に価値が高く、工芸史上特に重要な地位を占める技法である。

［２］ 保持者の認定について

① 保持者

氏　　名　　今泉　今右衛門　（雅号　十四代　今泉　今右衛門）

生年月日　　昭和 37 年 12 月 30 日（満 51 歳）

住　　所　　佐賀県西松浦郡有田町

② 保持者の概要

同人は、佐賀県有田町の窯元・今泉家に生まれた。同家は、江戸時代に鍋島藩窯（はんよう）の御用赤絵師を代々務めていた。同人は、武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科を卒業した後、陶芸作家・鈴木治（すずきおさむ）に師事した。平成 2 年からは、父・十三代今泉今右衛門のもとで家業に従事し、色鍋島を中心とする色絵磁器の陶芸技法を習得した。平成 13 年に十三代今泉今右衛門が死去したことにより、同 14 年に十四代今泉今右衛門を襲名（しゅうめい）した。その後も陶芸作家として活発な創

作活動を展開しながらさらに研鑽を積み、色絵磁器の技法及びその表現について研究を深めた。

同人の色絵磁器の特徴は、家伝の色鍋島の技法を中心としながら、江戸時代から鍋島焼に用いられている、墨に含まれる膠分が撥水剤の役割を果たして絵具を弾く特性を活かした白抜きの技法である「墨はじき」を発展させた技法を駆使するとともに、上絵付にプラチナを施して変幻的な白金色を輝かせる「プラチナ彩」を導入するなど、色絵磁器の表現に新生面を開いたことにある。その作風は、伝統技法の上に独自の作風を確立し、現代感覚に溢れ、芸術的にも優れたものとして高い評価を得ている。

同人は、日本伝統工芸展を中心に作品を発表しており、平成 10 年第 45 回展で日本工芸会会長賞（優秀賞）、同 16 年第 51 回展で東京都知事賞（優秀賞）を受賞している。平成 20 年には第 16 回ＭＯＡ岡田茂吉賞工芸部門優秀賞を受賞し、同 21 年には紫綬褒章を受章し、同 24 年には日本陶磁協会賞を受賞している。

また、同人は、平成 14 年に色鍋島今右衛門技術保存会会長に就任して以来、重要無形文化財「色鍋島」の技術指導に当たっている。平成 22 年以来、社団法人日本工芸会（現　公益社団法人日本工芸会）の理事に就任し、同 24 年以来、同会西部支部の幹事長に就任し、また、日本伝統工芸展で鑑査委員を歴任するなど、斯界の発展や後進の指導・育成に尽力している。

以上のように、同人は、色絵磁器の技法を高度に正しく体得しており、かつ、これに精通している。

③　保持者の略歴

昭和 60 年　　武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科（金工専攻）卒業

同　63 年　　鈴木治に師事（平成 2 年まで）

平成 2 年　　十三代今泉今右衛門のもと家業に従事（同 13 年まで）

同　 8 年　　第 43 回日本伝統工芸展初入選

同　10 年　　社団法人日本工芸会（現　公益社団法人日本工芸会）

正会員（現在に至る）

同年　　第 45 回日本伝統工芸展日本工芸会会長賞（優秀賞）

作品「染付墨はじき梅花文鉢」

同　14 年　　十四代今泉今右衛門を襲名

同年　　色鍋島今右衛門技術保存会会長（現在に至る）

同　16 年　　第 51 回日本伝統工芸展東京都知事賞（優秀賞）

作品「色絵薄墨墨はじき雪文鉢」

同　19 年　　第 54 回日本伝統工芸展鑑査委員（以後 2 回歴任）

同　20 年　　第 16 回ＭＯＡ岡田茂吉賞工芸部門優秀賞

同　21 年　　紫綬褒章

同　22 年　　社団法人日本工芸会（現　公益社団法人日本工芸会）

理事（現在に至る）

同　24 年　　日本陶磁協会賞

同　年　　公益社団法人日本工芸会西部支部幹事長（現在に至る）